

# 「グルンドフォスの年間スポンサーは、 私たち選手が活躍するための モチベーションを与えてくれています」

## Interview with Denmark National Badminton Team

2016年からグルンドフォスが年間公式サポーターとしてスポンサーしているデンマークのバドミントン代表チーム。昨年のリオ・オリンピックで「高松ペア」と対戦、銀メダルを獲得。今回「ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン」出場のために来日した女子ダブルスの選手とヘッドコーチに、プロ選手としての心構えやスポンサーであるグルンドフォスについて、お話を伺いました。

**Q: まず、皆さんのバドミントンとの出会いをお聞きしたいと思います。**

**カミラ:** 私の出身地はデンマークの最北端の「スカーゲン」という町です。両親や兄弟が地元のバドミントンクラブに熱心に通っていたので、私も小さいころから自然にバドミントンをするようになりました。



カミラ・リター・ユール

1983年生まれ(33歳)。ジュニアクラブのコーチだった母親の影響で、4歳からバドミントンを始める。20歳でデンマーク代表入り。2010年にベタゼンと女子ダブルスペアになり、2013年に世界選手権で銅メダル獲得。

**クリスティナ:** 私の故郷は、スカーゲンの南にある「オールボー」

という町です。両親が地元のバドミントンクラブに関わっていたので、6歳の時に始めました。

**ケネス:** デンマークには公営バドミントンクラブが全国にあり、誰もが容易に始めることができます。私も学生時代、近所のバドミントンクラブに通っていましたが、その施設は24時間オープンしていました。

**Q: プロ選手になろうと思ったきっかけは、何でしたか？**

**カミラ:** 私の場合はテレビでバドミントンの試合を見て、憧れを持ちました。デンマーク代表チームに招聘されることになり、私はプロ選手になる夢を追いかけようと決めました。



**クリスティナ:** 私は、最初は趣味でバドミントンを始めたのですが、次第にやり甲斐のある試合に出る機会が増えたことがきっかけです。またアジア人選手とプレーするチャンスがある点に特に興味を持ちました。アジアの選手は、世界のバドミントン界でも強豪ぞろいですからね。

**Q: これまでで一番誇らしく感じた試合は何ですか？**

**カミラ:** 2016年のリオ・オリンピックへの出場です。金メダルを賭けた決勝では日本の高橋・松友ペアに勝つことができませんでした。銀メダルを首にかけて表彰台に立った時の気持ちは格別でした。オリンピックに出場できただけでも、心から幸せだと思いました。

**クリスティナ:** 今でも決勝戦の終盤の5ポイントをもう一度戦いたいほど悔しい気持ちはあります。でも、素晴らしい思い出になりましたね。

**ケネス:** スポーツではつねに勝者と敗者がいます。負けた時には悔しいという自分の本音の感情に対処しなければなりません。しかし、そうした経験を経て、選手たちはさらに強くなるのです。

**カミラ:** 試合中は自分たちのハッピーな気分を振りまくように意識していました。そうした気分が観客に伝われば、それはより多くのエネルギーとなって自分たちに返ってきますから。

**Q: プロ選手として、バドミントンの試合に臨む時に大切なことは何ですか？また、他のスポーツと比較して、何が求められますか？**

**クリスティナ:** メンタルな面では、まず自身自身を信じて、必ず勝利できると信じるのが大切だと思います。

**ケネス:** メンタルな面やテクニクとは別に、フィジカルな強靭さも欠かせません。2013年に彼女たちからコーチを頼まれて以来、私は身体能力を高めるために多くの練習を課してきました。例えば、より強靭な脚



クリスティナ・ベダセン

1986年生まれ(31歳)。バドミントン愛好者の両親の影響で、6歳でバドミントンを始める。20歳でデンマーク代表入り。2010年にリター・ユールと女子ダブルスペアになり、2013年に世界選手権で銅メダル獲得。

部を作るためのトレーニング。バドミントンはスピードが要求されるスポーツなので、自分のポジションをつねに素早く変えてプレーしなければなりません。

**カミラ:** もし私がランナーで時間を競っているのなら、競争する相手は距離であり、その距離自体が変わることはありません。バドミントンの場合は、対戦相手は動きまわります。しかも、たとえ同じペアのチームと対戦しても、毎回、試合の展開は同じではありません。

**クリスティナ:** バドミントンのダブルスでは個人がうまくプレーすることは当然ですが、自分のパートナーも見ていなければなりません。試合中は、お互いに多くの「メンタルなWi-Fi」を送り合っているんですよ。

**カミラ:** ある意味、二人でプレーするのは一人でプレーするよりも難しいです。でも、ペアの息がぴったり合った時の感覚は素晴らしいです。

**ケネス:** 毎日、同じメンタリティでいるのは難しい。いつもより動きが鈍くなる時もあります。そんな場合は、パートナーの動きに自分を合わせなければいけません。自分のパートナーをサポートし、二人そろって積極的に相手に立ち向かわなければならぬのです。



ケネス・ヨナセン (43歳)

デンマーク代表チーム所属ヘッドコーチ。元プロバドミントン選手として活躍後、指導者の道に。2012年のロンドン・オリンピックでは、バドミントン英国代表チーム男子シングルスコーチ。昨年、デンマーク代表チーム・アシスタントコーチからヘッドコーチに昇格。

### Q: ところで、デンマークでのバドミントンの位置づけは、どうなっていますか？

**ケネス:** バドミントンは、かつてデンマークでとても人気の高いスポーツでしたが、その後、人気がちよっと落ちてしまいました。デンマークでのバドミントンの競技人口は、5番目が6番

目です。バドミントンを国家的なスポーツとしている、例えばインドネシア、マレーシア、中国といった国々とデンマークは凌ぎを削っているわけですが、中国だけでもバドミントンの競技人口はデンマークの全人口(550万人)に匹敵します。こうした観点からみると、アジア諸国にはプロ選手になる可能性を持った人材をより選抜できる利点があると言えるでしょう。

### Q: デンマーク代表チームのコーチとして、ケネスさんが特に気にかけているのはどんな点ですか？

**ケネス:** 2013年に、カミラとクリスティナから彼女たちのコーチになってほしいと頼まれました。それまで、私は男子のコーチングを専門にしていたので驚きました。身体的なトレーニングの他に彼女たちがペアとして機能するように一緒に戦略を練り、彼女たちの強みや弱みも話し合っています。一つひとつの試合はもちろん大切ですが、もっと長期的なスパンで彼女たちのキャリアを見るようにしています。それは個人の生き方に関係することですから。

### Q: 日本や日本選手の印象はいかがですか？

**ケネス:** 私が初めて東京に来たのは1997年です。その当時に比較すると、国も人々も外国人に対してよりオープンになっているように感じます。通りを歩きながら、人々のフレンドリーな表情を見るのが大好きです。また日本では年配者に対して敬意が払われていることも、心が温かくなりますね。バドミントンの日本代表チームはこの10年間に大変な進化を遂げました。今ではバドミントン界の「スーパーパワー」です。

**カミラ:** 高橋・松友ペアと戦ってからは、日本でも東京で通りを歩いていると人々に声をかけられるようになりました。

バドミントンのデンマーク代表チーム所属の女子ダブルスペアは、世界ランキング4位(2017年9月現在)。2016年のリオデジャネイロ・オリンピックでは、日本代表の高橋・松友ペアと決勝戦で戦い、激戦の末、銀メダルに。その3週間後に開催された「ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン2016バドミントン選手権大会」では、今度はデンマーク・ペアが日本チームを破り、雪辱を果たした。

**クリスティナ:** 日本食は美味しいですね。宿泊しているホテルの近くでお気に入りのレストランを何軒か見つけましたよ。

**Q: グルンドフォスはこの2年近く、バドミントンのデンマーク代表チームのスポンサーをしてきました。11月のチャイナ・オープンでは、お二人もグルンドフォスのロゴ付ウェアを着てプレーし、カスタマー・ミーティングにも参加する予定ですね。**

**カミラ:** 私たちは、世界各地でスポンサーの方々やそのお客様とお会いすることをいつも楽しみにしています。皆さんがバドミントンのデンマーク代表チームに興味を持ってくれるのは励みになります。

**ケネス:** バドミントンをやっている若いデンマーク人プロ選手にとって賞金獲得の可能性はとても大きなモチベーションになります。でもそのためには、まずはスタートラインにつくための経済的支援が必要です。

**カミラ:** 私たちペアはその実力が認められたことで、賞金も獲得できるようになりました。しかし、バドミントンのデンマーク代表チームにいる、私たちほど認められていない仲間にとって、プライベートスポンサーの重要性は大きいのです。

**Q: グルンドフォスは、水を動かし、貯水・洗浄して、世界の最も弱い立場にいる人々に安全な水を提供するという事業の核心を、今後も継続的に発展させたいと考えています。その点を、どうお思いですか？**

**ケネス:** グルンドフォスとバドミントンのデンマーク代表チームは、どちらもデンマークにルーツがあります。私たちと同じく、グルンドフォスはグローバルな舞台で自分たちよりもずっと大きな企業と競争しています。事業を継続させるためには、革新的で新しいアイデアに対するオープンな姿勢とともに、つねにベストを尽くす必要があります。チームワークや会社の価値観、そして製品を信じる志の高い社員が皆、同じ思いを共有していることが、大きな原動力になっているのだと思います。



ダイハツ・ヨネックスジャパンオープン2017でケネスヘッドコーチのアドバイスを受ける両選手